

75歳まで働きたい？

「自分の都合のいいように働けるのであれば働きたいが、現実はそのような仕事はないと思う」
(女性58歳)

「仕事に満足。今以上に勉強しもっと頑張っていくつもり」
(女性69歳)

「死にかけている年齢で働くのは厳しい」
(男性26歳)

「年金が少なくて生活出来ないから」
(男性70歳)

「とんでもない話。60歳になったら堂々隠居させて」
(女性54歳)

「働かざる者食うべからず」
(女性63歳)

「今でも疲れがとれない。仕事の質が劣化しそう。引き際は大切」
(女性52歳)

「明日を生きるために稼がなければいけないなら、働くしかない」
(女性30歳)

「無理です」(男性65歳)

働いてほしいと言っています。でも本当は、自由がほしい、ゆったり暮らしたい。国民年金では現在の生活を維持することはできないので、働く覚悟はありますが……」

神奈川県のN子さん(60)

は、夫と老後について日々話している。

「同い年の夫は定年後の再雇用で契約社員として働いている。収入は現役時代の約半分ですが、ホームに入る義母の扶養も含め、どうにか賄えている状況です。私たち夫婦にはホームに入るという選択肢は残されていません。デイケアやホームヘルパーなどのサービスを駆使して生きるしかないだろうなと思っています」
すでにリタイアした上の

世代のようにはいかなないと生活実感があり、今回の提言が将来の不安に拍車をかけているのだ。

2年前に突然大腸がんを発症

子ども3人を育て上げた愛知県の会社員R子さん(56)は離婚を経験し、中年になってから就職した。今は築45年の中古マンションに長男と一緒に住んでいる。「75歳提言」には呆れるとともに、途方に暮れたという。

「60歳定年と思って働いていたら途中で年金支給が65歳になって。介護保険料も40歳から支払っている。それだけでもうんざりしているのに、今度はいきなり75

歳まで働けと言われたようなもの。体力や気力は衰えていくのに、どう生活設計をすればいいのでしょうか」
現在、手取りは月15万円

今の会社で働き続けても退職金はなく、好待遇の企業への転職も考えづらい。

「健康であり続けて、今の収入が維持できればぎりぎり生活はできると思いますが、でも、万が一事故にあったら？ 病気になるたら？ 介護保険のサービスの自己負担が増えたら、年金だけではとても生活できるとは思えないのです」

とはいえ、Rさんは、子どもたちに頼るのは避けたいと考えている。若い世代こそ、不安定な世の中だからだ。
「十分な収入が得られず、

結婚を躊躇したり、子どもを持ってなかつたりする社会で、子どもたちの世話になりたいなんてとても言えません」

アンケートの中で多かったのは、「一律に年齢で区分すべきではない」との意見だ。身体機能や認知機能などの健康面には当然個人差がある。そして、高齢者の手前の区分の年齢でも、健康状態ががらりと変わることもあってあるのだ。

65歳を過ぎても大学教員として教壇に立ち続けたKさん(72)は、2年前に大病に見舞われた。58歳まで公務員として35年間働き、その後10年間大学教員を務めた。年齢とともに体力は衰えたが、働く意欲は一向に衰えなかった。教員退職後は、大学のシンクタンクに入り、働きたした。

病が発覚したのは、研究の一環で作ったNPO法人が認証を受けて、ようやく立ち上がり、「さあここから」という時期だった。Kさんとしても思いもよらな

かったという。

「大腸がんが見つかったんです。手術、入院で仕事は休んでいる状態です」

現在は自宅に戻れているものの、通院しながら化学療法を続けている。この先教壇に立つ機会はおそらくもうないと、Kさん自身が自覚している。

「勤労意欲は今でもありません。働くことで社会とつながれるし、向上心も持てると思います」

いま「自分は大丈夫」と自信を持っていても、明日にはどうなっているかわからない。それも踏まえて、Kさんは、年齢ではなく、その時々個人の健康や意欲次第で現役からリタイアかを選択できてもいいのではないかと考える。

「年齢で区切るのはある種の差別です」

前出の松本氏も話す。

「年齢だけ上げて、統計上のことで国民にメリットは少ない。受け入れる社会の仕組みを整備していけるかが重要です」